

博士論文の要約

博士論文題目

石川啄木論攷 青年・国家・自然主義

タグチ ミチアキ

田口 道昭

1、目次・章構成

序

第一部 啄木と日本自然主義

- 第一章 啄木と日本自然主義 実行と芸術 論争を中心に
- 第二章 啄木・樗牛・自然主義 啄木の樗牛受容と自然主義
- 第三章 「卓上一枝」論 自然主義の受容をめぐって
- 第四章 啄木と独歩 ワズワス受容を中心に
- 第五章 「食ふべき詩」論 相馬御風の詩論とのかかわりで
- 第六章 啄木と泡鳴 「百回通信」を読む
- 第七章 近松秋江との交差 実行と芸術 論争の位相
- 第八章 「硝子窓」論 二葉亭四迷への共感

第二部 「時代閉塞の現状」論

- 第一章 「時代閉塞の現状」を読む 本文と注釈
- 第二章 「時代閉塞の現状」まで 渡米熱と北海道体験
- 第三章 必要 をめぐって
- 第四章 「時代閉塞の現状」の射程 青年 とは誰か
- 第五章 啄木における 天皇制 について 「時代閉塞の現状」を中心に

第三部 啄木と同時代人

- 第一章 啄木と与謝野晶子 日露戦争から大逆事件へ
- 第二章 啄木・漱石・教養派 ネオ浪漫主義批判をめぐって
- 第三章 啄木と徳富蘇峰 或連絡 について
- 第四章 啄木と石橋湛山

第四部 啄木の位置をめぐって

- 第一章 中野重治の啄木論
- 第二章 啄木と「日本人」 啄木の受容をめぐって
- 第三章 「明日」という時間

第五部 『一握の砂』から『呼子と口笛』へ

- 第一章 『一握の砂』の構成 他者 の表象を軸に

第二章 啄木と朝鮮	「地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつゝ秋風を聴く」 をめぐって
第三章 啄木の伊藤博文	「誰そ我にノピストルにても撃てよかしノ伊藤のごと く死にて見せなむ」をめぐって
第四章 『呼子と口笛』論	二重の生活 のゆくえ
石川啄木略年譜・執筆評論・同時代文学年表	
あとがき（初出一覧）	
索引（人名・事項・啄木作品）	

2、全体の要旨

本論文は、明治 30 年代から明治 40 年代にかけて歌人・詩人・評論家として活躍した石川啄木（1886～1912）の文学について考察したものである。本論文の考察の中心は啄木の代表的な評論「時代閉塞の現状」（明治 43 / 1910 年執筆）である。この評論は、当時の文学思潮である自然主義文学批判を展開しつつ、「青年」と「国家」の関係について考察を加えた評論で、近代日本文学史だけでなく、思想史においても重要な位置を占めている。

本論文では、この「時代閉塞の現状」はじめとする啄木の自然主義文学批判の意義を、同時代の思想史的・文学史的文脈の中に位置づけることを試みた。また、啄木の自然主義批判の主要な根拠となったのは明治のプラグマティスト田中王堂の哲学であるが、本論文では、啄木の自然主義批判によって、自然主義作家や評論家たちの文学的・思想的傾向の位置づけについて分析した。さらに自然主義者以外の同時代文学者・思想家との交差について検討したほか、啄木の代表作で、近代歌集の中でも大きな位置を占める『一握の砂』や詩編「呼子と口笛」等、啄木の主要な文学作品についての考察を行った。

本論文の構成としては、第一部において、「時代閉塞の現状」執筆以前の啄木の評論を取り上げ、自然主義文学隆盛当時の「実行と芸術」論争における啄木の位置づけを行った。第二部では、「時代閉塞の現状」の注釈及び考察に関する論文をまとめている。第三部は、啄木と与謝野晶子、漱石と漱石門下、徳富蘇峰、石橋湛山等、同時代人との思想的・文学的な関連を考察した。第四部は、啄木像に関する諸論考を収め、啄木研究史や読者の受容の問題について扱っている。第五部は、啄木の文学において最も重要な詩歌に関する論考を収め、啄木における「実行と芸術」の問題の行方として位置付けた。

3、各章の要約

本論文は、以下のような内容で構成されている。

第一部「啄木と日本自然主義」は、啄木が田中王堂のプラグマティズム哲学を批評の根拠としながら、自然主義文学をはじめとする同時代作家たちとどのように切り結んで行ったかを論じている。

第一章「啄木と日本自然主義 実行と芸術 論争を中心に」は、自然主義論壇における 実行と芸術 問題の背景と論争、この論争における啄木の位置について整理した。日本の自然主義文学は人生観・世界観の変革を迫る文芸として登場したが、当時の為政者は、個人主義 の抛り所で危険性があるものとして自然主義を警戒した。自然主義を擁護した文学者は、「本能満足主義」という批判に対して、文学 芸術 と 人生 実行 は異なるものであると主張した。その 後退 を批判したのが自然主義文学を支持した青年たちであり、啄木もその一人である。啄木は、田中王堂のプラグマティズム批評を根拠に独自の自然主義批判を展開するが、大逆事件後は、さらに具体的な政治・国家批判の中で文学を捉えなおした。

第二章「啄木・樗牛・自然主義 啄木の樗牛受容と自然主義」は、自然主義文学運動の先蹤としての高山樗牛と自然主義文学の関係を、啄木の評論活動の展開を合わせ鏡にして論じた。樗牛の「美的生活」論は「本能主義」として受容され、欲望する個人の問題は、啄木の文学観に大きな影響を与えた。啄木は、樗牛の思想を観念的に掃き清めた姉崎嘲風の思想の影響下で 一元二面観 という考えを展開したり、自然主義思潮との精神的対決の中で、進化論と樗牛の超人言説を接合しようと試みたりしたが、それは矛盾を抱えたまま、田中王堂の受容へとかたちを変えた。しかし、樗牛の「本能主義」 欲望する個人の問題は、啄木の評論の中に通奏低音のように残った。

第三章「『卓上一枝』論 自然主義の受容をめぐる」は、啄木がはじめて自然主義について論じた評論「卓上一枝」(1908年)を取り上げ、葛藤と矛盾を見せる受容の様相を考察した。高山樗牛の天才観の影響を強く受けていた啄木は、自然主義文学の思想を「個人の権威」を犯すものとして捉えつつ、一方で、それを認めざるを得ない時代の「現実」も理解しており、当時の啄木がもっていた「哲学」を動員して両者に折り合いをつけようとする。「卓上一枝」はそうした啄木の矛盾した心情が反映されていた。

第四章「啄木と独歩 ワーズワース受容を中心に」は、本人の意思にかかわらず自然主義者と目された国木田独歩と、啄木の文学活動の親近性を、ワーズワースを媒介にして論じた。啄木が独歩を意識するのは、評論「卓上一枝」からであり、同じ年の独歩の死によって、より強く意識されることとなった。その影響は、少年時代の賛美や悲哀、また、「回想」というスタイルにも表れている。その一方で、啄木は、浪漫主義を「弱き心の所産」と考え、独歩的なものを相対化しようとしていた。しかし、その短歌にみられるように、啄木の中には否定しようとして否定しきれない独歩的な浪漫主義が生き続けた。

第五章「『食ふべき詩』論 相馬御風の詩とのかかわりで」は、自然主義論壇で詩の変革の論議がなされていた中で、啄木の詩論をどのように位置づけるべきかを考察した。石川啄木の代表的な詩論を当時の口語詩論議の中に位置づけると、表現主体の問題を強調している点が注目される。それは、当時、「観照」的立場に傾斜していった自然主義文学批判につながるものであった。「詩人」を主語とするか、「人」を主語とするかの相違は、相馬御風を代表とする自然主義者の詩の理念と啄木の求める詩の理念とを分かつものだった。

第六章「啄木と泡鳴 『百回通信』を読む 」は、 実行と芸術 論争の中で、「実行即芸術」を唱えた岩野泡鳴に対する啄木の共感と批判とを論じたものである。石川啄木の評論「百回通信」(1909年)には、自然主義の文学者で、「新自然主義」、「刹那主義」、「実行即芸術」を標榜していた岩野泡鳴への関心が見られる。啄木は、 現実 の中に 理想 を求め、生を燃焼しつくして止まない泡鳴に対して人間的共感を覚えながらも、泡鳴の 現実 の中に、当時啄木が否定しようとしていた浪漫主義の残滓をみないではいられなかった。特に明治のプラグマチスト田中王堂の哲学を啄木が受容するなかで、泡鳴批判が展開されていく過程を考察した。

第七章「近松秋江との交差」は、評論・随筆家時代の近松秋江(当時は徳田秋江)との関係について論じた。石川啄木と近松秋江は、高山樗牛と田中王堂に文学的・思想的な影響を受けたという意味で共通点がある。それは、日本の自然主義文学をめぐってなされた「実行と芸術」論争においてうかがうことができる。しかし、秋江の「実行」理解が、単に生物的、即物的であったことは、やがて両者を分かつことになり、啄木がより社会的な磁場からの批評性を求めていったのに対し、秋江は単なる「現実」の肯定へと行き着いていった。

第八章「『硝子窓』論 啄木と二葉亭四迷 」は、エッセイ「硝子窓」(1910・6)について論じた。1909年秋以降の啄木は、二重の生活 の統一を主張してきたが、翌三月には、「意識しての二重生活」に生きるしかないと表明するに至る。その経過と、新しい処し方を考察する中でクローズアップされてきた二葉亭四迷への共感について考察した。二葉亭四迷の「文学嫌い」は友人である内田魯庵をはじめとする文壇では理解されなかったが、啄木は二葉亭四迷に共感しつつ、文明批評としての文学を断念したことの屈託を表明していた。

第二部「『時代閉塞の現状』論」は、評論「時代閉塞の現状」に注釈を付すとともに、評論が書かれた同時代的文脈について考察した。

第一章「『時代閉塞の現状』を読む」は、本文と注釈を付した。注釈は、語釈及び簡単な事典的説明のほか、啄木との関わりを記述するなど、評論の文脈理解を目的とした。

第二章「『時代閉塞の現状』まで 渡米熱と北海道体験 」は、評論「時代閉塞の現状」の執筆に至るまでの啄木の軌跡を追って考察した。「時代閉塞の現状」における

閉塞感 の形成には、日露戦争前後の国内外の環境が大きな要因としてある。一つは、当時の渡米熱が米国内の移民排斥運動によって閉ざされていったことである。啄木は、野口米次郎の詩集『東海より』に感銘を受け、渡米の志を持つが実現することはできなかった。もう一つは、啄木の北海道体験である。啄木は北海道に「自由の国土」を夢見るが、その厳しい現実を知る。アメリカや北海道に抱いていた浪漫主義が閉ざされ、直面した「現実」が、啄木に時代の 閉塞感 を感知させた。

第三章「必要 をめぐって」は、「時代閉塞の現状」の中で、争点となっている「必要は最も確実なる理想である」という言葉の由来について考察した。「必要」という言葉は、従来、中野重治らによって、「必然」の意味と理解されてきたが、そうではなく、ク

ロポトキンの『麵麩の略取』の中で使用されている「各人の必要に従つて分配する」事を「基礎とする新組織」という一節の影響が考えられる。そして、その前提に、「欲望」「欲求」を根底に置きつつ、「理想」を「現実」の中に発見しようとする田中王堂のプラグマティズム哲学の受容があった。また、赤羽巖穴の評論「必要は権威なり」を検討し、啄木への直接的な影響関係はないものの問題意識が共有されている点を指摘した。

第四章『『時代閉塞の現状』の射程 青年 とは誰か 』は、評論で論じられる 青年 は、どのような階層が想定されていたのか、当時の 高等遊民 問題と併せて論じた。「時代閉塞の現状」の 青年 論は、魚住折蘆や安倍能成の評論に触発されたものであり、中学校以上の「智識ある青年」を中心として想定していた。盛岡中学校中退とはいえ、啄木もそうした教養のある青年層の一人であり、そうした 青年 層を前提に評論が執筆されていることを、『成功』の読者との対比で考察し、この評論が、分析し尽くせなかった 間隙を残していたことを明らかにした。

第五章『『時代閉塞の現状』を読む 『天皇制』をめぐる 』は、評論本文中の一節に 天皇制 もしくは天皇暗殺を読み取る先行論があるが、評論全体の整合性や、啄木自身の 天皇制イデオロギー への関心から検証した。「時代閉塞の現状」は、「強権」＝「国家」の考察を青年に呼びかけたものであったが、 天皇制 の問題を正面に据えたものではなく、この評論執筆後の啄木の認識から遡行して読み取ることは誤りである。

第三部「啄木の同時代人」は、与謝野晶子、徳富蘇峰、石橋湛山、夏目漱石、大正期教養派との比較及び影響関係の考察を通して、啄木の文学と思想の位置づけを行った。

第一章「啄木と与謝野晶子 日露戦争から大逆事件へ 』では、主に日露戦争から大逆事件に至る両者の作品について触れながら、その思想史的・文学史的な位置づけを明らかにした。当初、日露開戦を喜んでいた啄木に対し、晶子は「君死にたまふこと勿れ」を發表し、晶子の主観的意図に反して「教育勅語」と相反する論理を展開した。後に、啄木が、日露戦争や韓国併合に対して疑義を表明し、「国家」批判にまで展開していくのに対し、晶子は、大逆事件については当時の為政者に対して厳しい眼差しを向けながら、「教育勅語」を進歩的なものと位置付け、韓国併合に対する無条件な肯定や 皇室主義 にかからめとられていった。

第二章「啄木・漱石・教養派 ネオ浪漫主義批判をめぐる 』は、夏目漱石の『それから』や『彼岸過迄』に対する教養派青年たちの批評を検討し、漱石と啄木はネオ浪漫主義への批判において漱石の弟子たちよりも近いものがあったことを論じた。

第三章「啄木と石橋湛山」は、石橋湛山の初期の文芸評論が、田中王堂の哲学を受容する中でなされたものであることから、啄木の評論との共通性があることを論じた。思想面において社会主義・無政府主義に共感したとされる石川啄木だが、「急進的自由主義者」とも論じられた湛山的な方向との接点もあったことを明らかにした。

第四章「啄木と徳富蘇峰 或連絡 について 』は、啄木は後に国家主義者として有名になる徳富蘇峰と一見共通するところはないように思われるが、1909年秋の啄木の思

想には、その現実主義に於いて蘇峰と近接するものがあった。また、その「青年論」にも共通点がある。これらの近接点とその後の分岐に就いて考察した。

第四部「啄木の位置をめぐって」は、文学史・思想史上における啄木の位置・啄木像について考察した。

第一章「中野重治の啄木論」は、「啄木に関する断片」(『驢馬』1926・11)にはじまる中野重治の啄木論の変遷を追った。戦前の中野の発言は、啄木の短歌的抒情などを「弱さ」と切り捨てていたが、戦後は、そうした「弱さ」が、現実を見据えることのできた「強さ」の半面であると再評価するようになっていったことを検証した。併せて、中野の啄木論に対して「実存主義的啄木像」を対置した国崎望久太郎の啄木論を検討した。

第二章「啄木と『日本人』」 啄木の受容をめぐって」は、日本という国民国家の枠組みの中で啄木が評価されてきた理由について考察している。「国民詩人」という啄木像は、一九五〇年代の「国民文学論争」が一応の目安になるが、その後の高度経済成長において、農村から都市への人口流動の中で、「日本人」の心にうったえかける「望郷」の詩人として広く理解されていったことを分析した。

第三章「『明日』という時間」は、「時代閉塞の現状」や『悲しき玩具』で使われた「明日」という言葉をキーワードに啄木の「時間観念」について考察した。「明日」という言葉は、当時の日露戦後の文学がもつ停滞感を批判する内容をもっていた。そのような時間認識、歴史認識は、啄木が受容したプラグマティズム思想や社会主義思想が持つ歴史観とも無縁ではなかった。一方、そのような歴史観が啄木に「今日」からの疎外感を導きだし、歌集『一握の砂』や『悲しき玩具』らの歌に結実していった。

第五部「『一握の砂』から『呼子と口笛』へ」は、啄木の詩歌について触れた章である。

第一章で、『一握の砂』の「煙」という章を中心に、他者の表象が、歌集の構成上どのような役割を果たしているかについて考察した。石川啄木の歌集『一握の砂』は全五章で構成されているが、他者の表象は歌集の主人公に厳しい現実をつきつける存在であり、各章への転換にかかわっていることがわかる。

第二章は「地図の上朝鮮国にくるぐると墨をぬりつゝ秋風を聴く」の成立事情と同時代的な位置づけについて論じた。この歌にみられるような啄木の朝鮮の認識を育んだのは、東京朝日新聞に載った洪川玄耳の「恐ろしい朝鮮」という記事や、大逆事件後の「閉塞状況」と、韓国併合前夜の韓国に対する言論弾圧の報道であった。東京朝日新聞の校正係にいた啄木はそれらの記事を読む中で、はっきりしたものではなかったとはいえ韓国併合への違和感を短歌に歌うことができた。

第三章は、啄木が伊藤博文を詠んだ歌について考察した。植民地批判とともとれる歌を詠んだ啄木が、伊藤を英雄視した歌を作ったのは、啄木が、伊藤の「漸進主義」というべき政治姿勢に共感する面があったことが挙げられる。また、当時、伊藤は、併合に対し

ては強硬的ではないと見られており、山県有朋・桂太郎の韓国併合路線とは区別されていたことを明らかにした。

第四章は、啄木の最後の詩編『呼子と口笛』に収録された詩の読解と成立事情、詩篇としての構成についての考察を行い、「二重の生活」という啄木の問題意識のひとつの結論としてこの作品を位置づけた。

4、成果のまとめ（結果・考察）

本論文の成果は、評論「時代閉塞の現状」を中心とする石川啄木の文学を、同時代の文学史・思想史の中に位置づけようとしたことにある。特に「実行と芸術」論争における啄木其自然主義文学批判が、単純な統一という方向ではなく、「意識しての二重生活」という「屈折」を経て、歌集『一握の砂』や詩編『呼子と口笛』に結実していく過程を検証している。

具体的に言えば、まず、自然主義文学を中心に展開された「実行と芸術」論争の展開と内容について改めて整理し、その論争における啄木の評論の位置付けを行ったことが挙げられる。特に、1909年後半に、のちに「大正期教養派」と呼ばれる安倍能成、阿部次郎らの評論が登場してくるが、「新浪漫主義」へと展開されて行く彼らの評論との差異を明らかにしている。

第二に、評論「時代閉塞の現状」に注釈をほどこし、同時代的文脈の中に位置づけた。また、評論のキーワードとなる「時代閉塞感」の形成や、「必要」という概念の出典、評論が前提とする「青年」の問題点等を考察した。特に、「必要」という概念が田中王堂とクロポトキンの思想との結節点になっていること、啄木が念頭においている「青年」が、当時の中学・高等学校生以上の階層を念頭においており、一面性を免れなかったことを明らかにした。また、この評論に「天皇制」批判を読み取る先行研究を検証し、より同時代文脈に即した読みを示した。

第三に、啄木の同時代人である、与謝野晶子や夏目漱石やその門下、徳富蘇峰や石橋湛山らの文学観や思想と対比する事によって、啄木の文学史的・思想史的位置とともに、明治文学史・思想史の諸相の一端を明らかにした。

第四に、『一握の砂』とその周辺に関する論考として、歌集の構成、韓国併合に関する歌、伊藤博文に関する歌を取扱い、その背景を明らかにすると同時に、歌集における位置づけなどを明らかにした。さらに、啄木晩年の作品として『呼子と口笛』の読解を試み、先行研究にある伝記還元的な傾向を排し、表現と思想が織りなされた詩作品であることを明らかにした。

注 「石川啄木」の「啄」は、本来「啄」(キバ付き)が正しい表記だが、PCの通常フォントにはなく、環境依存文字を作成・使用した場合、環境により見え方が異なることが想定されるため、表題以外は「啄」と表記している。